

“There really is such a thing as society.” 社会の中心、社会のため



高知県安芸福祉保健所
健康障害課長
倉本 玲子

平成24年九州大学卒業、関門医療センター初期臨床研修医。26年同麻酔科専攻医。27年九州大学麻酔科蘇生科入局。九州医療センター、九州大学病院に勤務。29年退職。令和2年12月高知県新型コロナウイルス感染症宿泊療養施設診療医。3年10月高知県入職。安芸福祉保健所健康増進担当を経て、6年より現職。趣味は、豆からひいてくれたコーヒーを飲み、健康を味わうことです。

新型コロナウイルス感染症の流行を契機に公衆衛生行政(保健所勤務)に職を転じ、4年が経過しました。無関心な人間の中にまかれた公衆衛生の種がひよんなことから芽吹き、育ち始めたケースとして、お世話になった方々への感謝を込めて、自己紹介させていただきます。

大学生(公衆衛生の土壌)

福岡県福岡市で過ごした大学時代はサークル活動に打ち込み、自分であるはずの医学の学習にはまったく身が入りませんでした。何事も深く考えず、情動の赴くまま行動する性格でしたので、知的で清廉な公衆衛生の世界は縁遠いものを感じられ、授業で覚えたのは「コーヒーは健康によい」という教授のお話だけ。あとは、産業医学で自動車や運動靴の工場を見学したのが楽しかったという、誠に不出来な学生でした。

また、公衆衛生で必須の統計学は、教養課程で受けた講義の2コマ

とで、あつさり閉眼してしまい、とりあえずは臨床医として生きていく道を選んだのでした。

麻酔科医と無職(休眠)

研修病院に麻酔科専攻医として1年間残った後、出身大学の麻酔科に入局しました。元々は麻酔の修練後に外科に移るつもりでしたが、進路に悩むようになり、入局後2年たった平成29年3月末、仕事を辞めて休眠に入りました。とはいえ、元気な無職でしたので、産業医大で産業医学ディプロマの資格を取得したり、マラソンやゴルフに挑戦したりしているうちに、気付けば3年がたとうとする頃、コロナ禍が始まりました。

人々の元NHSSスタッフ(イギリスの国民保健サービスで働く医療・介護従事者)、75万人のボランティア、ステイ・ホームの要請に従っている国民等、危機に立ち向かう人々を称え、一緒にやり遂げようと鼓舞し、「コロナウイルスによる危機が証明したことが一つある。それは、社会というものが本当に存在するということだ」と述べたのです。加えて、同氏は発言の1週間後に入院、重症化して集中治療を受け、退院時には命を救ったNHSSへの深い感謝を表明しました。

新自由主義・個人主義で知られるサッチャー元首相の“There is no such thing as society.”(社会などというものは存在しない)という有名な言葉を、サッチャリズムの継承者であつたはずの同氏が否定したこと、流行初期に感染対策を軽視し対応の遅れを招いた同氏の姿勢が大きく変わったことが話題になりました。

これまでとこれから

令和5年には、10年ぶりに科学院の研修を受講し、保健福祉行政管理分野分割前期で、保健所医師として必要な知識を、教授いただきました。再び和光の地に学び、お世話

目にして理解不能となり、修得を放棄。医師国家試験の受験では、計画性のなさが災いし、公衆衛生は一番手堅く点が取れる科目といわれるにもかかわらず、試験前日を迎えても手付かずの窮地に陥りました。幸い、持ち前の強運を発揮して、何とか試験には合格しましたが、まさか将来、自分が公衆衛生医師として働くようになるとは、思いもしませんでした。

研修医(種がまかれる)

私の中に公衆衛生の種がまかれたのは、山口県下関市で研修医をしていた時でした。

国立保健医療科学院が実施する

養施設で診療医にならないか、との声掛けを受けた私は、3年8か月ぶりに社会に復帰することになります。

公衆衛生医師(芽吹き)

宿泊療養施設での勤務は苦労も多かったですが、前高知市保健所長の堀川俊一先生や県の保健師さんたちとお仕事を一緒にする中で、市民・県民のために身を粉にして働く奉仕者としての姿に感銘を受け、令和3年10月に高知県に入職。6年4月からは、安芸福祉保健所健康障害課長として、健康増進、母子保健、感染症、障害保健福祉に関わる業務を総括しています。

そこには、研修医仲間と支え合いながら成長している様子や、自分たちのように微力な存在でも、束になれば「地域の健康を守る」一助になれるのでは、との熱い思いがこぼれ出ていました。

その後の人生で、一度は社会から離脱した自分が、再び人と支え合い、束になって「地域の健康を守る」仕事に就いている近況を、大変ありがたく感じました。